

ハヤカワ文庫 <SF972>

ホワイト・ライト

ルーディ・ラッカー

黒丸 尚訳

早川書房

訳者略歴 昭和26年生，昭和50年
東京大学法学部卒，英米文学翻訳
家 主訳書「グラス・ハンマー」
ジーター「モナリザ・オーヴァド
ライブ」ギブスン「ウェットウェ
ア」「空洞地球」ラッカー（以上
早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
FT=Fantasy
HB=Hi! Books

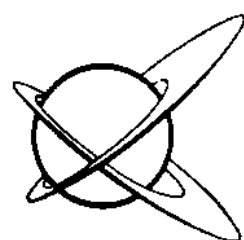
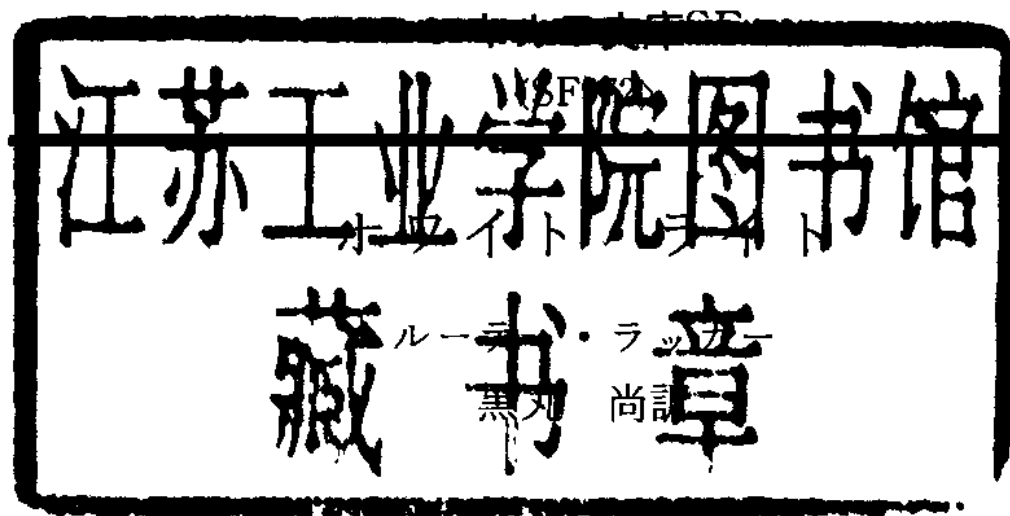
ホワイト・ライト

〈SF972〉

一九九二年五月二十日 印刷 一九九二年五月三十一日 発行	(定価はカバーに表 示してあります)
著 者	ルーディ・ラッカー
訳 者	黒 丸 尚 くろ ま ひさし
発 行 者	早 川 浩
発 行 所	株式 早 川 書 房 郵便番号 一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二 電話東京(三二五二)三二一一(大代表) 振替口座番号 東京六〇四七七九 乱丁本・落丁本は本社またはお買求 めの書店にてお取替えいたします。	

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・株式会社川島製本所
Printed and bound in Japan

ISBN4-15-010972-9 C0197



早川書房

3166

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1992 Hayakawa Publishing, Inc.

WHITE LIGHT

by

Rudy Rucker

Copyright © 1980 by

Rudy Rucker

Translated by

Hisashi Kuroma

First published 1992 in Japan by
HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by
arrangement with SUSAN ANN PROTTER LITERARY AGENT
through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

本書はハイデルベルク大学の数学研究所に招かれていたあいだに書いたものである。そういう滞在の資金を提供してくださったアレクサンダー・フォン・フンボルト協会に感謝する。

目次

第一部

1	墓場にて……………	三
2	どうしてぼくがこうなったか……………	一八
3	獣の数字……………	二八
4	バーンコ……………	四三
5	ドナルド・ダック……………	五四
6	イエスと悪魔……………	六八
7	死者に助けさせたまえ……………	八〇
8	光速……………	九三

第二部

9	ヒルベルトのホテル……………	一〇三
10	ミルクって何……………	一二五
11	エプシロンⅡゼロ……………	一二九
12	形相の図書館……………	一四三

13	真 実……………	一五
14	アレフ・ワンにて……………	一七二
15	ハイ・テイー……………	一九〇

第三部

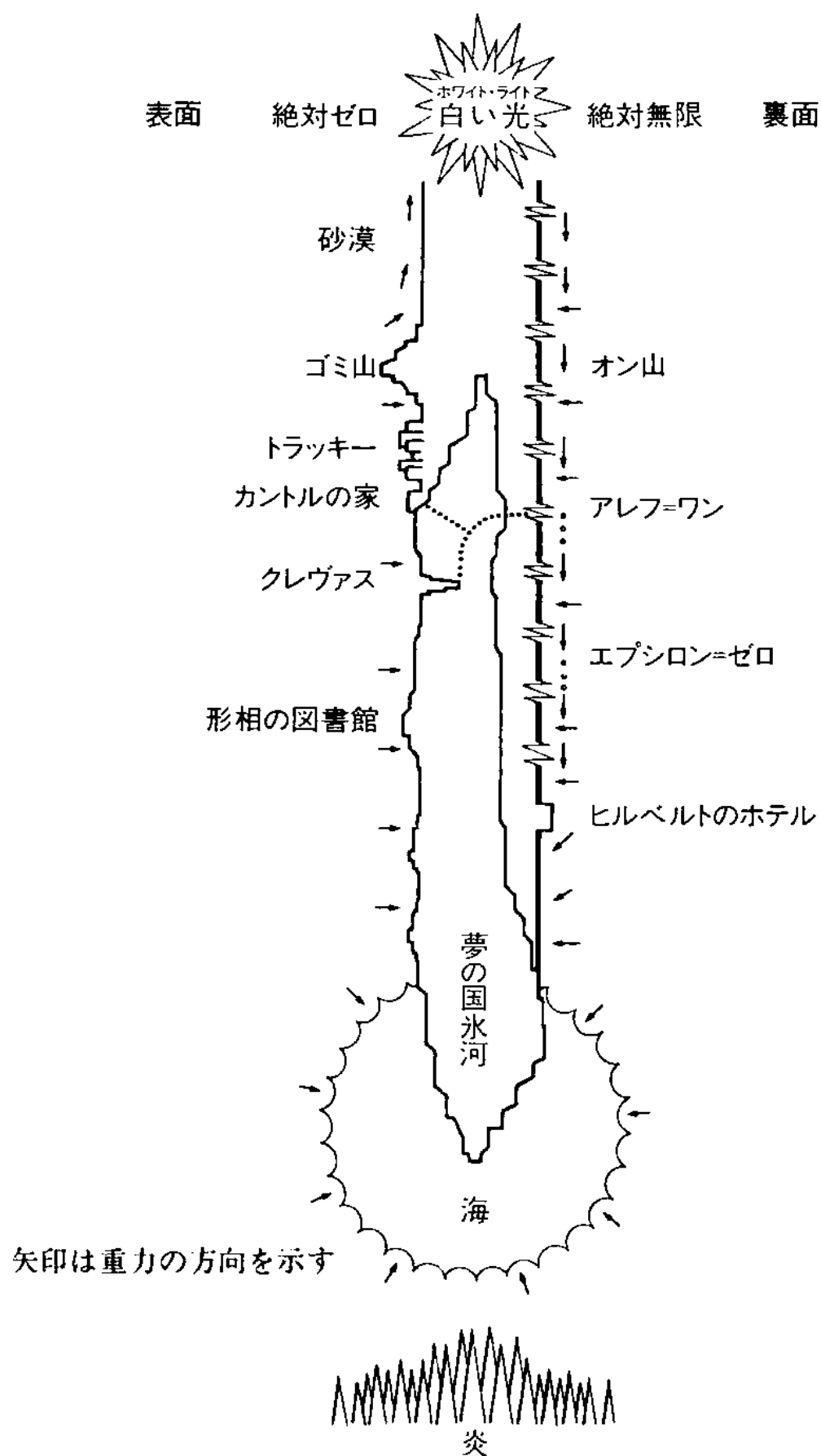
16	膨らむラヴ・ドール……………	二〇七
17	都会の恐怖……………	二三〇
18	豚の唾……………	二三二
19	キャンディのハート……………	二四四
20	喋る車……………	二六〇
21	絶対ゼロ……………	二七四

第四部

22	ハロウィーン……………	二八五
23	調べ物……………	二九八
24	教 職……………	三二一
25	バナッハ・タルスキ分割……………	三三三
26	ひどい小娘……………	三三七

27 (おしまい)にはならない……………三五二

解説／鈴木治郎……………三五七



図はF・R著『シメンおよび、そこへの行き方』（版元不詳）より

ホワイト・ライト

第一部

亡霊を見たからといって、それですべてではない。さらにデスマスクが積み重ねられ、上へ上へと、ずっと天まで続いている。

——ニール・キャサディ

1 墓場にて

そして一カ月間も雨が降った。ぼくはまた煙草を喫いはじめた。ノイズ／情報——ぼくは帽子をかぶって外にいた。

水曜の午後で、センター・ストリートを登って行って、テンプル・ヒルの墓場に行った。雨のせいで他人の姿はなく、静まりかえっている。ぼくは、大きくてねじれた木の下に立った。滑らかな灰色の木肌が、流れ落ちる雨のおかげで、なおのこと滑らかになっているブナの木だ。幹には襞や皺が寄り、木自体の時間の尺度では、ふにゃふにゃしているのだろう。

雨の中、墓場の木の下で、ぼくは連続体問題を考えていた。われらの地の父祖ゲオルグ・カントルが、一八七三年に発表し、解こうとするうち気が狂ってしまった問題だ。

光が瞬き、ぼくには靈魂どもが押し寄せてきていると信じられた。連続体問題を解決できるなら魂を売るか、と靈魂どもがたずねてくる。その解法を拝見しようじゃないか。魂を拝見しようじゃないか。

最初は、取引が本当に成立したのかどうか、判断しがたかった。四年前にも、ぼくは「^{ホワイ}白い光」に連続体問題についてたずねる機会があった。それはヴェトナム戦争の最中の戦没将兵記念日のことで、細い首をして旗をもった男たちがいて——やれやれ。「それで連続体は……」とぼくはたずね、真剣に、三関節の指で鉛筆を挟み^{はさ}もった。「楽にしなよ、おまえさんには準備ができてない」というのが返答だった——あるいはむしろ、「返答」は記号論理学で記述できるものではない、という気分だった。

それでもぼくは研鑽^{けんさん}に励み、裡^{うち}なる眼を鋭くして、そうした鮮やかな瞥見^{べっけん}の大半を捉え^{とら}、名づけることができるように——観念をエレガントな公式でまとめあげ、その公式が魔法の呪文となって閃きを呼び戻せるようにしたいと思っていた。ぼくはその雨の中、墓場において、準備ができており、亡霊どもに抜け駆けするつもりでいた。

テンプル・ヒルには、ぼくがとりわけ気に入っている石がひとつあった。一七九三年のエミリー・ワズワスの墓碑銘で、それには、こうある。「あなたも死ななくてはならないことを忘れるなかれ」と。ぼくには新鮮だった——人間の知性の高まり、実存の現実の高まりだ。最初にその石を眼にしたのは数カ月前のことであり、読んで、幸せな気分になったのだが、そのときのことだった。黒い蠅^{はえ}の糞が蠅^{はえ}となって石から舞い上がり、ぼくを狙ってきた。おまえの上にとまったら、おまえは死ぬぞ——ぼくは逃げた。

けれどぼくは戻り、そのブナの木の流れる幹のそばで、縦溝と横溝を見つめ、わが心の通廊を見つめた——靈魂どもが連続体問題の解法を提示していると信じていた（信じて何がいけな

い)。パターンがなお途方もないものになったけれど、ぼくは頑張り、すばやくパターンを名指しして、沈むことなく、高まる水の上に浮いていた――

雨が激しくなってきたことに、ぼくはしばらくして気づく。もっとましな雨宿り場所がないかと見回して、ワズワスの墓地区画近くの小さな霊廟れいびやうを選ぶ。急いで駈け寄って、扉を試してみる。両開きの扉になっていて、ガラスに鉄の格子模様だ。一方が開くので、ぼくは中にはいる。床になんの変哲もない木のドアが埋めこんである。ぼくはそれを蝶ちょうつがい番ごと引き剥がし、階段を駈けおる。さらにドアがあって、ぼくは背後に投げてしまう。階段、ドア、黒い光――ぼくはさらに早く走り、追いつく。じきに棺桶の音が聞こえてくる。がたごと、ぎしぎしと、階段のほんの数歩先を落ちていく――ぼくは跳ぶ。そして中に着地する。赤サテンというわけだから、こびりついた精液――

「でも、これは数学ではありませんよ、あなたは……」

「レイマンです。フィーリクス・レイマン」ぼくは返事する。みんなはダーク・スーツにヴェストを着ている。金の時計鎖にウィングティップの靴。数学者国際会議、パリ、一九〇〇年。ダーフィット・ヒルベルトが演壇に立つ。数学の問題全般について話しており、未解決の問題の個人的トップ二十三件のリストへと話を進めていく。

ヒルベルトは小柄で、尖った口髭くちひげをしており、上手な語り口の持ち主だ。リストの最初の問題は連続体問題だが、ぼくの注意を引きつけたのは、それに先立つこういう言葉だ。「数学のある問題を解くことがかなわないとしたら、その理由はしばしば、われわれがより一般的な立